

秋田県藤里町視察研修報告

保健福祉課三橋玲子（課長補佐）、同石井淳平（介護保険係長）
総務政策課首藤浩平（総務係）

平成 30 年 12 月 3 日

1 藤里町の概要

藤里町は能代市を就業場所とする人が多く、会社づとめ志向が強い。町内には 7 つの集落があり、役場の所在する藤琴地区に人口の約 4 割が集中する。藤琴川上流の「北部地区」では高齢化率は 50% にのぼる。日常的な買物、医療、進学のことを車で約 50 分、バスで 1 時間 30 分以上かかる能代市に依存している。

小学校、中学校、幼稚園、保育所がそれぞれ 1 つずつあり、保育所は 3 歳未満児、幼稚園は 3 歳以上児を受け入れており、変則的な幼児保育・教育体制となっている。もともと幼稚園があり、保育ニーズが高まったことから、未満児を受け入れる施設として保育所を設置した。

医療機関は、診療を終了している「山下医院」に火曜日と金曜日の午前中だけ医師が出張して内科の営業を行っている。

町内の小売店として夜 9 時まで営業しているスーパーが 1 軒ある。コンビニエンスストアはない。居酒屋は藤琴地区に 8 軒あり、人口に占める割合としては多い。

バス路線は 4 系統あり、基幹の路線では一日あたり 14 便あるが、休日には半分の 8 便となるほか、ダイヤも旧来のままであることから JR との接続も悪くなっており、利便性はひくい。

役場を始めとした公共施設や商店などの大半は藤琴地区に集中しており、藤琴地区だけをみるとコンパクトで暮らしやすい町といえるが、最南端の矢坂地区から最北端の北部地区までは 10km 以上離れていること、藤琴川と粕毛川の 2 河川に沿って町が形成されていることから、藤琴地区以外の住民にとっては日常的な買物や通学等にも移動の困難が生じている。

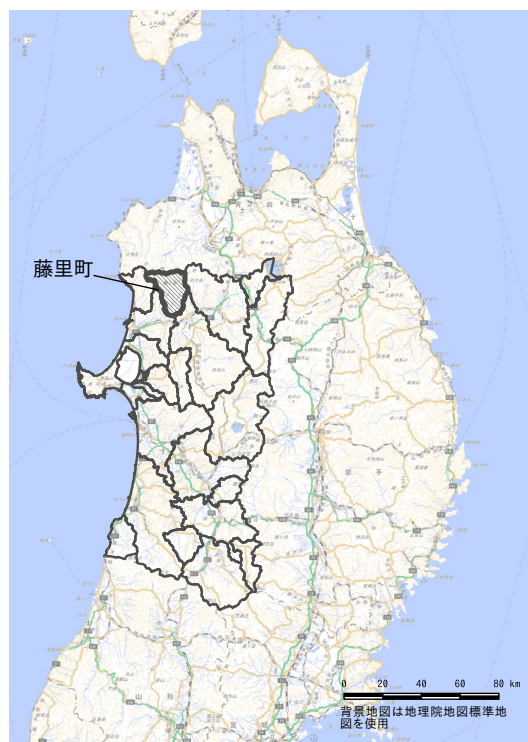


図 1 藤里町の位置



図2 藤里町の主な集落



図3 藤里町中心街と視察施設

2 三世代交流館内の交流スペース

図書館や教育委員会事務局がおかれている三世代交流館に町内の僧職の方が運営されているコーヒースペース（サロン「よってたもれ」）が設置されている。視察時は営業していなかったが、町内の方が集まることのできる交流スペースとなっている。



図4 町内の僧職の方が運営するコーヒースペース



図5 交流館内に設置されたキッズスペース

サロンの奥にあるキッズスペースには東京「おもちゃ博物館」との連携により実現した木のおもちゃコーナーが設置されている。学齢前の子どもが過ごせる場所がないというお母さんたちの声を取り入れて試験的に導入中のものだという。

図書室は蔵書数こそ少ないものの専任の司書が配置され、イベントなども多く開催されているようだ。



図6 蔵書数は少ないながら活動的な図書室

3 公共交通

平成 28 年度からデマンド交通「駒わりくん」の運行を開始した。従来の公共交通は、路線バスの秋北バス 1 社のみ営業しているが、便数も少なく不便が多かった。平成 8 年から 65 歳以上の免許返納者に対してバスの無料券を配布していた。土日の便数の少なさや、能代市の病院までの所要時間が自家用車の約 50 分と比較して倍の 1 時間 30 分以上かかることから、高齢者の通院の負担が大きかった。また、町内の移動にも乗り継ぎが必要で不便も多い。

このため、路線バスの空白時間帯にデマンドバスを走らせることとした。乗車場所は路線バスのバス停が基本で、復路の降車場所のみ自宅前まで可能としている。バス路線の無い区域は独自に「駒わりくん」専用バス停を設置した。

近年、自治体でデマンドバスを運行するケースが増えているが、路線バスの廃止が決まってから導入を検討するケースが多い。藤里町ではそのような事態になる前から町として取り組みを始めるべきと考えた。

「駒わりくん」は空白地公共交通として位置づけられるため、路線バスの空白時間帯に運行することが原則となる。そのため路線バス空白時間帯に運行時間を定め、前日までに乗車バス停の位置を電話連絡することとした。位置づけとしては「予約型乗り合いタクシー」となるため、ルール上このような運用となっている。

利用者としては、「駒わりくん」は便利な反面、予定なキャンセルなどに心理的な負担が大きいらしく、自分の予定を優先できる既存のバス路線と併用して、たとえば往路は路線バスを利用し、買物などで荷物の増えた復路に「駒わりくん」を利用し、自宅前で降車するなどの賢い利用方法をしている方もいる。

乗り合い率は 1.2 程度で、基本的には 1 便あたり 1 組の利用が大半となっている。

4 Re デザインプロジェクト

プロジェクトのきっかけの一つは、役場前にあった「かもや食堂」が廃業になったこと。かもや食堂は地域の方が集まってご飯を食べたり宴会をしたりするコミュニケーションの場で、店主の方もそのことを意識され、店の継続を希望していたが体調不良で店を閉めることとなった。せっかくの立地を活かして、旧「かもや食堂」をリノベーションすることとし、デザインコンペを行った。審査員に有名な建築の先生をお願いし 100 以上の応募を得ることができた。その中から 15 組を選定し、公開選考を行った。その結果、リノベーションされた今の「かもや堂」の姿となった。



図7 デザインコンペを経てリノベーションされた「かもや堂」



図8 かもや堂1階の部分は地域おこし協力隊事務所となっている

現在は会議やコミュニティの集まりとして利用するほか、一階部分は地域おこし協力隊の事務所として利用している。今後はより事業性の高いもの、例えばカフェのような投資を回収できるような事業に活用したいと考えている。

5 フードカー

フードカーという食料品の移動販売を行い、地域おこし協力隊の方にコーヒーを入れてもらってその場をコミュニケーションの場として活用した。本当の狙いは住民からの声を聞きとる場としての活用であり、住民意見の収集の重要な場となっている。聞き取りした内容の一部は、地域おこし協力隊で発行している情報誌やコミュニティ新聞の中で取り上げて活用している。



図9 かもや堂2階は自由に使える会議スペースになっており、ここで説明を受ける

6 移住戦略

空家を一棟リノベーションして移住体験住宅として利用してる。定員8人で3日以上、30日以内という条件で提供している。平成29年度から運用している、移住者向けの住宅は一棟民間の住宅を借受けし、リノベーションして転賃している。

7 ローカルベンチャー事業

アルビオンという化粧品会社が白神研究所を設立した。現地採用も生まれ雇用増進に寄与している。今年は第2研究所も開設された。

ローカルベンチャー事業のねらいとして、人口減少以上に小売店が減少してしまい、このままでは住民生活が成り立たない危機感があった。そのため、地域で事業継承していく取り組みが必要となった。

撤退してしまったタクシー会社の営業所をリノベーションしてローカルベンチャー協議会の事務局として活用している。現在藤里町にお住まいされている方で、東京で研修事業などを手がけていた主婦の方に事務局に入ってもらってローカルベンチャー事業としてスタートしている。

平成29年度からの事業なのでまだ成果は出せていないが、外部人材の取り込み以上に町内の人材を活用することが重要と考えて準備をしている。特に子育て世代へ向けた「新しい働き方」として提案するために準備を進めている。藤里町の人はサラリーマン志向が非常に強く、そうした雇用労働以外の働き方が提案できれば良いと考えている。

対外的には起業家が町内に來ることのできる土壌づくりが大切だと考えている。藤里町のようなところでは新しことを始めるのは周りの反対や「どうせうまくいかない」ということを言い出す人が必ずいる。そのような声に負けずに起業を進めるための後押しをする環境を作りたいと考えている。



図10 廃止になったタクシー営業所の跡地を利用してローカルベンチャー事業の事務所を設置した。

8 公共施設管理計画

公共施設の補修経費は予算上限を決めてその中で優先順位をつけていくようにしている。そのために係長クラスで集まって業者からメンテナンスの研修を受けて、日常的なメンテナンスの手法について学ぶとともに、管理計画においては予算範囲内で必要な修繕の優先順位を決めている。

9 社会福祉協議会

「福祉でまちづくり」を合言葉に「藤里方式」として地域トータルケア推進事業を実施している。社会福祉協議会が地域包括支援センターを運営しており、このことで行政とのつながりも強くなっている。総合相談や生活支援システムの構築において大きなメリットがある。

引きこもりは仕事を失うことからスタートするケースが多い。就職が決まらず時間だけが過ぎていくと空白期間が生まれてしまう。空白期間を面接などで問われることが嫌で次第に外に出なくなってしまうという経過をたどる。

平成22年から「こみっと」を設立し、集まれる場所作りに取り組んだ。立ち上げの際には老人クラブや各地区の集会で説明し、引きこもりに対する情報提供を求めた。調査対象は18歳以上55歳未満



図 11 農業改善センターでプラチナバンクの人たちがとってきた山菜やこみっと研修生が調理したうどんを提供する



図 12 社会福祉協議会施設内に設けられた交流スペース

とし、社協職員が二人程度で調査を実施した。笑い話のようだが、引きこもっていると社協が訪問してくるのがいやで仕事に就く人もいた。

福祉職は治療行為をするわけではないので原因探しはしない。能力的に劣っていなくても、生活に困らなければずらずと引きこもり生活を続けてしまう。外に出てきてもらうためのレクリエーションの場を「こみっと」に設置したが、引きこもりの人はレクリエーション事業には出てこない。みんな働く場所を求めている。

シルバーバンクを母体に、あらゆる階層の人が参加できるプラチナバンクを設置した。プラチナバンクはあらゆる人に活躍の場を与える機会として、若者支援事業として引きこもり対策につながっていった。今は根っこビジネスでクズの根を採取している。引きこもりの人も一般の人と仕事をすると刺激を受け、普段はコミュニケーションが難しい人でも少しずつ変わっていく。

現在は複数の集まりの場を設置している。予防事業としての「元気の源さんクラブ」、介護者の集い「みんなの縁側」、男性を中心とした「をとこ組」などがある。「をとこ組」は男性中心の事業で年間5回開催。最後はカラオケと飲み会で盛り上がる。このような場に出てこない人を引き出すための仕掛けとして実施した。通常15人から16人ぐらいで年齢層は60歳から80歳代となっている。



図 13 社会福祉の拠点「こみっと」は発電所の跡地を活用してつくられた



図 14 「こみっと」と同じ敷地内にある宿泊施設「クマゲラ」